

マルクスにおけるエコロジー経済学の萌芽  
—自然の EXPLOITATION とその邦訳語について—

山口拓美

本報告は、マルクスの地代論における EXPLOITATION 概念の使用法の中にエコロジー経済学の萌芽が見られること、しかし、マルクスの見地に即して「自然の EXPLOITATION」を日本語で論じようとする場合、EXPLOITATION に対応する一個同一の邦訳語が存在しないため、また、代表的な訳語である「搾取」も EXPLOITATION と正確に対応する語ではないため、議論に齟齬をきたす場合が少なくないこと、そしてこのことが、マルクス理論に基づいたエコロジー経済学の日本における発展に負の影響を及ぼしている可能性があること、以上を論じようとするものである。

1、『資本論』に見られるエコロジー経済学の萌芽

十九世紀前半にサン・シモンの信奉者たちは次のように述べた。

「人間による人間の EXPLOITATION、これが過去における人間関係の状態であった。人間と手を結んだ人間による自然の EXPLOITATIONこそ未来が示す姿である。<sup>1)</sup>

一方、この文が記されてから約 150 年後に、生態学者のオダムは、人間が自然の無思慮な寄生者になっているとして、次のように述べた。

「人類と自然とのつながりは、相利共生の段階に進化すべき時に来ている。もし人間が自然と相利共生的に生きてゆく方法を学ばなければ、“賢明でない”もしくは“適応していない”寄生者たちと同様、自己をも破滅させてしまうまでに人間の宿主を EXPLOIT してしまうであろう。<sup>2)</sup>

十九世紀前半には自然の EXPLOITATION の拡大に理想が見出されていたが、ここではそれが否定の対象になっている。約 150 年の間に、自然の EXPLOITATION が拡大し、それが深刻な生態学的危機を引起したため、自然に対して用いられる場合にも EXPLOITATION という語が否定的な意味を持つようになったと考えられる。いつ頃から、このような意味の変化が見られるようになったのであろうか。十九世紀後半に書かれた『資本論』第 3 巻の次の文は、自然物の EXPLOITATION が否定的な意味で使われている初期の事例の一つではないかと思われる。

「どちらの形態においても、土地——共同の永遠の所有としての、交替する人間諸世代の連鎖の譲ることのできない生存および再生産の条件としての土地——の自覚的、合理的な取り扱いの代わりに、地力の EXPLOITATION と浪費が現われる<sup>3)</sup>

一般に、社会と自然との関係が語られる場合、マルクスは自然支配を肯定す

るサン・シモン主義の継承者として描かれることが多い。しかし、上記引用文は、マルクスが自然の **EXPLOITATION** の資本主義的拡大を否定的に捉えていたことを示している。しかも、マルクスのこの文の背景には、生態学の祖の一人とされるリービヒによる近代農業批判がある。リービヒは、農業の持続可能性のためには、人間社会と土地との間で物質循環が適切に行われる必要があることを主張した人であるが、こうした認識は現代生態学の物質循環論の萌芽的形態といえるものである。リービヒの物質循環論に依拠したマルクスによる「地方の **EXPLOITATION**」の批判は、上で見たオダムの主張を先取りしたものであることができ、生態学的知見に基づいた経済学の萌芽的形態を示しているといえる。マルクスをエコロジー経済学の先駆者と見る論者は少なくないが<sup>4</sup>、**EXPLOITATION** 概念の使用法から見ても、そのような見解は妥当であると思われる。

## 2、自然の **EXPLOITATION**

マルクスによる自然力の **EXPLOITATION** 批判は、人間による人間の **EXPLOITATION** 批判と同時に行われるものであるから、ともすれば自然生態系の保全の方に関心が集中しがちなエコロジー経済学の中で独自の位置を占めることができる。おそらくこうした点を踏まえて、韓立新氏は、「自然の **EXPLOITATION**」という概念の重要性について、次のように述べている。

「現代においては、自然の『搾取』という用語がエコソーシャリズムを含むエコロジー関連の文献のなかに頻繁に登場し、またほとんどの場合、その根拠がマルクス理論に求められている。現代の環境問題が深刻化している今日、マルクス理論の内的な論理を積極的に生かし、自然の『搾取』を理論化し、さらに自然の『搾取』による『資本と自然の矛盾』の発生を、資本による人間の搾取および『資本と人間の矛盾』と並んで、マルクスのもう一つの重要な理論と見なすことは、マルクス研究者にとって避けられない課題になっている。<sup>5</sup>」

韓氏のこのような指摘は全く妥当なものであり、マルクス理論に基づいたエコロジー経済学の発展の方向性を適切に示しているといえる。しかしながら、ここですぐに問題となるのは「搾取」という日本語である。韓氏は、**EXPLOITATION** の訳語として「搾取」を用いているが、この「搾取」という日本語には、マルクス理論のエコロジー的發展を阻害してしまうような要素が含まれている。次に、この点を検討したい。

## 3、**EXPLOITATION** とその邦訳語

### ① **EXPLOITATION** と労働価値説

まず、問題の背景として、『資本論』における **EXPLOITATION** 概念と労働価

値説との関係がある。マルクスは EXPLOITATION という語を 1840 年代から用いているが、『資本論』の中で、彼はこの語を労働価値説と結びつけた。すなわち、Der Exploitationsgrad der Arbeitskraft がそれであり、これが剰余労働の必要労働に対する比で計測されうるとした。これは、マルクスによる重要な理論的貢献と考えられるものであることから、マルクスの EXPLOITATION 理論とは労働価値説に基づいた「労働力の EXPLOITATION」である、という認識が、ここから生じることになる。しかも、『資本論』全 3 巻の中で「自然の EXPLOITATION」が否定的な意味で取り上げられているのは、上で引用した「地力の EXPLOITATION」の箇所だけである。こうした事実が、マルクスの EXPLOITATION 概念とは労働についてのものであり、「自然の EXPLOITATION」という表現は、自然は労働をしないのだから、比喩的な表現でしかなく、むしろ不適切な表現であるという認識を生む背景となっていると思われる。そしてこのような認識が、「搾取」という訳語によって顕著に強められている。

## ②EXPLOITATION と搾取

『資本論』の日本語訳では、EXPLOITATION は主に「搾取」または「利用」と訳されており、上記引用文のように文脈上 EXPLOITATION が否定的な意味で使用されていることが明らかな場合には、「搾取」と訳されることが多い。しかし、『資本論』の中で「搾取」と訳されるのは EXPLOITATION だけではない。

“erscheint Auspressung von unbezahlter Arbeit nur als Ersparung in der Zahlung eines der Artikel, der in die Kosten eingeht, nur als geringre Zahlung für ein bestimmtes Quantum Arbeit;<sup>6</sup>”

「不払労働の搾取は、費用に入り込む諸項目の一つにたいする支払の節約としてのみ、一定分量の労働にたいする支払の軽減としてのみ、現われる。<sup>7</sup>」

“So verliert die Abpressung von Mehrarbeit ihren spezifischen Charakter;<sup>8</sup>”

「こうして、剰余労働の搾取は、その独特な性格を失う。<sup>9</sup>」

このように「搾取」は、『資本論』の日本語訳において、Auspressung と Abpressung の訳語としても用いられている。ちなみに、この箇所は、フランス語訳では extorsion が、英訳では extortion が用いられている。そこで、以上を整理すると、次のようになる。

独語	仏語	英語	日本語
Exploitation/Ausbeutung	exploitation	exploitation	利用
Exploitation/Ausbeutung	exploitation	exploitation	搾取
Auspressung/Abpressung	extorsion	extortion	搾取

ここから見てとれるのは、EXPLOITATION が担当する意味領域と「搾取」が担当する意味領域とが、異なっているということである。EXPLOITATION

と「搾取」とは、意味的に重なっているとはいえ、ずれて重なっているのである。このような意味のズレは、これら二つの語の語源に由来していると考えられる。

ドイツ語の **Exploitation** も英語の **exploitation** も、フランス語の **exploitation** に由来する語であり、**exploitation** の動詞形の **exploiter** は、さらに古典ラテン語の **explicare** に遡る。**explicare** は、接頭辞 **ex** 「外へ」が **plicare** 「折る、たたむ」に付いた語であり、「たたまれているものを開く」という意味を第一義として持つ。また、「なしとげる」という意味も持っている<sup>10</sup>。現代フランス語の **exploiter** には、他動詞の「開発する」という意味と自動詞の「手柄を立てる」という意味があるから、語源である **explicare** の意味が維持されているのが分かる。この動詞の名詞形についても、「開発」という意味を持つ女性名詞の **exploitation** と、「偉業」や「令状」等の意味を持つ男性名詞の **exploit** がある。ここで問題となっているのは、もちろん前者の他動詞と女性名詞の方である。『アカデミー・フランセーズ辞典』の初版（1694年）では、**exploitation** に対応する **exploiter** の語義として「森をエクスプルワテする」という用例が挙げられ、「森林の木々を伐採し加工し売却する」という意味説明が記されている。また、「土地、農地、小作地をエクスプルワテする」という用例に続けて **l'exploiter par ses mains** という用例文が挙げられ、これが **la faire valoir par ses mains** と言い換えられている。ここからは、次のようなことが分かる。すなわち、**exploiter** の核となる意味は「開く」「開発する」であり、しかもそれは「有効に利用する」「用益する」という意味での「開く」「開発する」である、ということである。

一方、日本語の「搾取」は『搾（しば）り取（と）る』を音読して生じた和製漢語<sup>11</sup> であると考えられている。つまり、「搾取」の語源は大和言葉の「しばりとり」であると考えられる。そして、もしそうであるなら「搾取」の本源的な意味は、上で見た独語や英語で示せば、**EXPLOITATION** ではなく **Auspressung** や **extortion** であるということになる。というのは、「しばりとり」という語は「人から金をしばりとり」というように、「…から～を」という語法において使用されるのが普通であるが、**EXPLOITATION** の動詞形にはこのような語法はない一方で、**auspressen** や **extort** にはそれがあるからである。言い換えれば、「人から金をエクスプロイトする」という語法はないが、「人から金をしばりとり」「人から金をアウスプレッセンする」「人から金をエクストートする」という表現は、これらの語の本来の語法なのである。それゆえ、「搾取」という語の意味の中心は **Auspressung** や **extortion** にあり、そこから **Exploitation** や **exploitation** の方へと延び広がっているが、その意味領域は、**Exploitation** や **exploitation** の意味の中心にまでは達していない、といえる。

逆にいえば、**EXPLOITATION** の意味の中心は、日本語版『資本論』の訳語で示せば「利用」であって、その意味領域は「搾取」の方へと延びているが、「搾取」の意味の中心にまでは達していない、といえる。

もちろん、**EXPLOITATION** の訳語として「搾取」が用いられる場合には、その日本語としての語源的意味とは区別されて、**EXPLOITATION** の意味で用いられるはずである。ところが、実際には多くの論者が、この語の語源的意味に影響されつつこの語を使用している。上で見たように、「搾り取る」という語は「…から～を搾り取る」という言い回しとともに使用されることが多い。このため「搾取」についても、「労働者を搾取する」という表現よりも「労働者から剰余価値を搾取する」という表現の方が、日本語として落ち着いた印象を与える。そして実際、マルクス主義関連の日本語文献においては、このような表現が多く用いられている。また、「労働者から剰余価値を搾取する」という表現からは、「剰余価値を搾取する」や「剰余価値の搾取」という表現が出てくる。これらの表現は、「労働者を搾取する」や「労働者の搾取」よりも日本語として落ち着いた印象を与える。そして実際、マルクス経済学関連の専門的な研究論文の中にもこのような表現が多く用いられている。

このように、日本語の「搾取」は、「剰余価値の搾取」と緊密に結びついた語として用いられており、そうであるが故に「自然の搾取」という表現には強い違和感が伴う。というのは、「自然の搾取」という表現からは、「自然から剰余価値を搾取する」という表現が連想されるが、このようなことは労働価値説を前提するかぎりありえない事態であるからである。このため、「労働力の搾取」と並ぶ資本主義的搾取のもう一つの側面として「自然の搾取」を論じようとする、そこでまずはじめに遭遇するのは用語の誤用という指摘であり、これがマルクス理論をエコロジー経済学的な領域へと展開する際の一つの難関となっているのである。

### ③**EXPLOITATION** とエクスプロイテーション

そこで、**EXPLOITATION** の訳語を例えば英語式の発音でエクスプロイテーションとカタカナ表記してみることが考えられる。**EXPLOITATION** をこのように処理すれば、この語を「搾取」「利用」「開発」「制覇」などと文脈に応じて訳し分ける必要がなくなるだけでなく、この語の語源的意味を生かしつつ日本語で労働力や自然のエクスプロイテーションを議論することができる。上で見たように、エクスプロイテーションという語は元来、森林や土地や鉱山のような自然物に対して用いられていた語である。それゆえ、「自然のエクスプロイテーション」という表現は比喩ではなく、むしろ「人間による人間のエクスプロイテーション」の方が比喩的な表現であったといえる。自然のエクスプロイテーションの拡大は、サン・シモン主義の全盛期には人類の未来の姿であったが、

『資本論』が書かれていた時代には必ずしもそうであるとは言えなくなり、現代ではむしろ規制の対象となっている。このような変化をもたらした重要な要因の一つは、いうまでもなく資本主義的生産様式の発展である。それゆえ、『資本論』に基づく資本主義分析の理論は、自然のエクспロイトーションの分析へと拡張される必要があったのであるが、日本では EXPLOITATION の訳語の問題がその妨げの一つになってきたのである。

マルクスは、1840年代からエクспロイトーションという語を好んで用いている。その中には、『ドイツ・イデオロギー』の「聖マックス」で展開されている商品貨幣関係における諸個人間の「相互エクспロイトーション<sup>12</sup>」や、『経済学批判要綱』に見られる資本による「自然および人間諸属性の全般的なエクспロイトーションの一体系<sup>13</sup>」の創出についての指摘等、興味深い論述がある。EXPLOITATION に一個同一の訳語を与えることは、このような様々なエクспロイトーションを研究するためにも有用な手続きであると思われる。

---

1 バザールほか『サン・シモン主義宣言——サン・シモンの学説・解義、第一年度、1828-1829』野地洋行訳、木鐸社、1982年、83ページ。 *Doctrine de Saint-Simon. Exposition. Première année. 1828.-1829., Troisième édition, Paris, 1831, p. 162.* 訳文の引用に際し、原文で exploitation となっている箇所を EXPLOITATION とした。これに続く二つの引用文についても同様の処理をした。

2 E. P. オダム『基礎生態学』三島次郎訳、培風館、1991年、313ページ。 Eugene P. Odum, *Basic Ecology*, Philadelphia: CBS College Publishing, 1983, p. 401.

3 マルクス『資本論』第三巻b（全5冊）、資本論翻訳委員会訳、新日本出版社、1997年、1424-1425ページ。 *Marx-Engels Werke*, Bd. 25, Berlin: Dietz Verlag, 1964, S. 820.

4 長島誠一『エコロジカル・マルクス経済学』桜井書店、2010年、参照。

5 韓立新『エコロジーとマルクス—自然主義と人間主義の統一—』時潮社、2001年、139-140ページ。また、島崎隆『エコマルクス主義—環境論的転回を目指して—』知泉書館、2007年、でも「自然の搾取」という概念が積極的に使用されている。

6 *Marx-Engels Werke*, Bd. 25, a.a.O., S. 54f.

7 マルクス『資本論』第三巻、前掲、74ページ。

8 *Ebd.*, S.55.

9 同上。

10 國原吉之助『古典ラテン語辞典』大学書林、2005年、参照。

11 『日本国語大辞典 第二版 第五巻』小学館、2001年、1433ページ。

12 『マルクス=エンゲルス全集第3巻』大月書店、1963年、441ページ。 *Marx-Engels Werke*, Bd. 3, Berlin: Dietz Verlag, 1958, S. 394.

13 マルクス『資本論草稿集②』資本論草稿集翻訳委員会訳、大月書店、1993年、17ページ。 *Marx-Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, II. Abt., Bd. 1, Tl. 2, Berlin: Dietz Verlag, 1981, S. 322.